

農家女性の戦後史



姉歯 曜著

日本農業新聞のくらし面の名物投稿欄「女の階段」は1967年に始まり、現在まで続いている。投稿者のほとんどは農家の女性である。

彼女たちは、異なる地域で異なる人生を歩んでも、農家の嫁や姑として、多くの共通する悩みや問題を抱えていた。

男尊女卑の風潮が根強く残る中、「家」の存続が最優先され、夫や義父母への絶対服従が求められる。育児も満足にさせてもらえないまま、家事と農作業に加えて介護まで担わされる一方、どんなに農作業に励んでも、経営に携わることが許されないことも、かつては珍しくなかつた。

そんな日々の暮らしの中で生まれるさまざまな思いをつづり、投稿する女性たちと、深く共感する女性たち。やがて、読者同士が結びつき、記事をスクランブルして回覧するグループが各地にできていく。そして、数年おきに全国の愛読者が集まる

大会が開かれるまでになり、励まし合う仲間づくりの場となってきた。

著者は、「女の階段」への投稿と、全国集会に合わせて編まれた手記集を読み込み、さらに8人の投稿者の半生を丁寧に聞き取ることで、農家の女性の視点から、日本の戦後史を再構成している。

戦後の民主化とその影響、公害と農薬被害、出稼ぎの拡大や兼業化の進行、減反政策、農産物の輸入自由化、過疎化や少子高齢化に伴う介護ニーズの急増と担い手の不足…。社会の動きと個々人の人生は深く結びついていたことが分かる。

手記集に書かれていることは決して過去の出来事ではないと著者は言う。それでも、やはり女性たちは一歩一歩「階段」を上ってきたと言えよう。

「1億総活躍社会」「女性が輝く社会」と現政権のスローガンは威勢がいい。けれども私たちの社会はそうした方向へ向かっているのか。農家の女性たちだけにとどまらず、私たち一人一人のこれまでとこれからを考える上で、さまざまなお心をかき立てられる渾身の一冊である。

投稿が映す社会と個人

あねは・あき 東京都生まれ。駒沢大教授。専門は消費経済論。著書に「『豊かさ』という幻想」など。